

私の好きな児童詩

下

日本作文の会 編



私の好きな児童詩

下

日本作文の会 編



民衆社

編 者

日本作文の会

〒113 東京都文京区本郷 2-18-9

電話(03)812-1493

編集担当 江口季好・綿田三郎

検印省略

私の好きな児童詩（下）

初 版	昭和55年 5 月 5 日
編 者	日本作文の会
発行人	沢田 明治
発 行	民衆社 東京都千代田区飯田橋2-1-2 カサイビル 電話・東京 (265) 1077 (代) 振替 東京 4-19920
印 刷	三栄印刷株式会社
製 本	東京美術紙工
装 幀	天造直子

落丁、乱丁の場合はお取り換えいたします。 0037-0021 58-8058

序にかえて

児童詩への愛

私たちのこよなく愛する日本の子どもたちは、六十有余年、都市で、農山村で、漁村で、また小さな島の分教場のなかで、生活を見つめ詩を書きつけてきました。それらは、子ども本来の素朴な生活感情の表白であり、繊細な美的直観であり、荒涼とした現実を見すえた明日への叫びであり、新鮮で強烈な批評でもありました。

それらはまた、戦前戦後の歴史のなかにちりばめられた、子どもの生命のうたでもありました。たとえば、その表現はつたなくとも、教師はその言外に子どもたちの心をとらえ、そのひだにふれつつ、子どもとともに生き、子どもの詩を心をこめて育ててきました。そして、子どもたちは世界に誇るべき日本の児童詩文化を創造してきました。

この『私の好きな児童詩』上下二巻は、六十有余年、その幾百万の作品のなかから、詩を愛し子どもを愛する教師の心をとらえてはなさなかった作品を集めた、児童詩への愛の証言集です。

児童詩への愛は、子どもへの愛であり、真実な教育への愛であり、これはまた日本の平和と民主主義への愛でもあります。この実践は今後も継承し、さらに大きく前進させていかねばなりません。

日本作文の会は、この真実を求める児童詩教育への愛の証言集、『私の好きな児童詩』を刊行するにあたり、この本がより多くの人々のなかで愛読され、日本の児童詩教育がいっそう前進することを願ってやみません。

一九八〇年二月

日本作文の会

目 次／私の好きな児童詩（下巻）

序にかえて 児童詩への愛	日本作文の会	1
--------------	--------	---

V 小さな生活者たち	7
------------	---

「小さな目」の児童詩	藤田 圭雄	9
この明るさ、この土くささ	広田 早紀	13
素直な目	宮田 朝海	24
愛の讃歌	竹花 初雄	32
子どもたちの切実な願い	田中 新治	42

大小濃淡さまざま	西村 元治	52
----------	-------	----

Ⅵ	たくましく生きる子どもたち	63
---	---------------	----

生きていく子どもの詩	法華 政良	65
------------	-------	----

生命力にあふれた子どもの目と心	石川 敬信	73
-----------------	-------	----

児童詩の本質に即して	小鮎 寛	82
------------	------	----

性格のはっきりした行動性のある詩	佐々井秀緒	91
------------------	-------	----

野性の児童詩の原点を求めて	佐々木賢太郎	101
---------------	--------	-----

Ⅶ	美しいことば	113
---	--------	-----

生き生きとした自分の叫び	佐藤 茂	115
--------------	------	-----

子どもの書いた詩はみんな好きだ	清原 久元	120
-----------------	-------	-----

抒情の精神	宮之原 彬	132
-------	-------	-----

VIII

眞実への目

..... 185

ことばの生動	羽田 松雄	141
美しい詩	山下 清三	151
身につまされる子どもの詩	徳差健三郎	158
未完の美・児童詩	柳内 達雄	168

IX

いのちのふれあい

..... 221

児童詩の詩と眞実	岩田 哲郎	187
このすんだ目	吉田六太郎	196
魅せられる児童詩	坂本 亮	205
かざりけのない子どもの姿	土居 清	212

障害に打ちかつ子ども	山田 とき	223
------------------	-------------	-----

作者と指導者に会いたい	渡辺政太郎	231
幼い日への郷愁	城 藤吉	242
いのちのふれあいのなかで	上田 武夫	251

X 未来へのはばたき	261
------------	-----

自然と歴史に思いをはしらせる子ども

に育てられた子どももの詩	ナガイシヨージ	263
この真実の美しさを	牟田 真澄	272
教育の成果としての詩	奈良 達雄	282
生きること	かつおきんや	290
豊かな未来への想像	土岐 兼房	299

あとがき	309
------	-----

V

小さな生活者たち

「小さな目」の児童詩

藤田 圭雄

おとうさん

一年 さの ゆう子

おとうさんは

いまごろなにしているかな

きゅうけいしているかな

それとも

でんわかけてるかな

はようかえつといで

おさけぬくめといたるわ

昭和三十八年の九月の末ごろだった。当時、あかね書房の編集長だった佐野文哉君が、朝日新聞に連載されている「小さな目」を集めて本にしたいのだが、その選を引受けてほしいと相談にきた。

私は、戦後、日本作文の会の諸君に伍して、児童詩には関心を持ちつつづけていたし、一度は、私自

身の目で児童詩の選集をつくってみたいとも思っていたので、喜んで承諾した。

佐野君は精力的に全国をとびまわり、各地の朝日新聞支局から、たくさんの「小さな目」を集めてきた。当時は、各地の地方版がそれぞれ独自の作品を毎日の新聞に載せていたから、その数はおびただしいものだった。しかも、そのころは、まだゼロックスなどというものが完備されていなかったもので、佐野君は、各支局で新聞を見せてもらい、めばしい作品を、すべて筆写してきてくれた。その苦勞は大変だったと思う。

私も佐野君の熱意に躍らされて、その文字ともいえぬような乱雑な筆字の草稿を、熱心に判読して、低学年、中学年、高学年の三つに分類し、各巻に解説を書いた。「現代っ子の生活と意見」という標題は佐野君が考えたものだ。私はあまり氣に入らなかつたけれど、販売政策上、この題にしたいというので我慢することにした。

ところで、私が一番こまつたのは盗作の問題である。何しろこの「小さな目」は、東京だけでも、都心、東部、西部、南部、北部、むさしの、三多摩という七つもの版があり、それぞれがった作品を載せている。だいたい、各地の小学校の先生にたのんで作品を推選してもらっている。しかし、先生たちもすべての作品に目をおしているわけではない。指導の初期の段階でこうした間違いがおきるのも止むを得ぬことかもしれぬ。

しかし今度の場合はそんなことはいってられない。私も佐野君も、おっかなびつくりで既刊の児童詩集と読み比べた。こんなのがでてきた。

おかあさんの手

大阪府 六年 男

ふとんの中にはいった時
せなかがかゆくなった

「おかあさんかいて」

といったら

おかあさんせなかに手を入れた

かあちゃんの手

大分県 四年 男

ふとんの中で

せなかがかゆくなった

「かあちゃん かいて」

と いったら

「しゃわしいのう」

と 手をいれてくれた
手がせなかにふれた時
ゾツとした

手がせなかにふれた時ゾツとした

たわしかおろしがねのような

手だった

水つかいをするからだろうなあ

たわしか おろしがねのような

手だった

それでも あたかい手だった

くびをまげて

かあちゃんの顔を見たら

めをつぶっているようだった

ぼくも 目をつぶって

かあちゃんのおいをかいだ

発想が同じというだけではない。これだけそっくりの語句がならんでいるのは、きっとどこかにその原形となる作品があったにちがいない。ふたりともそれをまねして書いたのだろう。

低学年から順序よく詩の指導をしていけば、こんな間違いはめつたに起こるまい。しかし、五年か六年になって、急に詩の指導をはじめ、詩とはこんなものだ、というので、教師が黒板に、

雪がコンコン降る

人間は

その下に暮らしているのです

と書いて、さあみんなも書いてごらんといったとき、子どものなかから、

雨がザアザア降る

犬は

えんの下でねています

という詩が生まれたら、教師はそれをどう処理するか、私は複雑な思いでこの二つの詩を見比べた。

そんな苦労はあったが、仕事は順調に進み、翌年の春には三冊の『小さな目』が誕生した。幸いに本は好評で、今日まで十五年経ってまだ毎年版を重ねている。

その年の秋だったか、NHKの推薦図書になって、ラジオの読書の時間に私は河盛好蔵氏と対談した。そのとき、河盛さんが一番喜んでくれたのが「おとうさん」の詩である。私とちがって、お酒の

好きな河盛さんには、この最後の一行が、何ともいえずしみじみと胸に響いたのであろう。

この明るさ、この土くささ

広田 早紀

私は南国の百姓の^{せがれ}倅に生まれ育った、土くさい人間である。だから、明るくて、素朴な土くさい子どもの詩が好きである。そういうものに親しみをおぼえる。

川の神さん

六年 川口 大三

うちのまえの川へ しよんべん ひった。

川の神さんに たのんだ。

しよんべんが 白く光って 水の上へおちて

「川の神さん どいてくれ」

いった。

「川の神さん どいてくれ」

そして ぶく ぶく ぶく ぶく

つばきを つうと 川の中へおとした。

白い あわを たてて 流れていった。

おれは 川の神さんは

おれは しよんべん ひりながら

どいたかな と思った。

ばちが あたると 思ったから

素朴で明るい詩である。ここには、健康な野性を持った子どもがいる。はじめの三行、「しょんべんが 白く光って 水の上へおちていった。／そして ぶく ぶく ぶく／白い あわを たてて 流れていった。」が描きだすイメージは鮮明で、私に少年の日がよみがえる。そして爽快な気分を味わっている作者に共感する。

このごろの男の子はどうか。私にも子どものころにこれをやったおぼえがある。いかにも男の子らしいふるまいだと愉快になるのはそのせいかもしれない。では、今の私がこの「川の神さん」をこのましく思うのは、年とった人間の単なる郷愁か。そうではない。私がこの詩に出会って心をひかれたのは、一九五二年である。それは、むさぼり読んだ『新しい綴方教室』と、はじめて教えた一年生「あぜみちの子ども」たちとに、綴方というものの、子どもというものに開眼させてもらった翌年であった。『新しい綴方教室』のなかの、三年生の子がいつてのけた、

むぐしたくなった小便

いそいでした。

じゅうとした。

ゆっくりした。

白いあわが、

ながくながく流れていった。